

## 梨の紋羽病対策実演(東京都東大和市)

2010年12月、東京都東大和市の果樹園に北多摩果樹研究会のメンバーにお集まり頂いて、モンパ病対策の実演会を開催しました。果樹栽培の天敵・モンパ病に対しては薬剤での処置が一般的ですが、決定的な効果が無いというのが現実。そこで微生物によるモンパ病対策の考え方を説明し、“VS・3種”を使った方法を実演しました。

果樹を栽培していて決して、無関係でいられないのがモンパ病との戦い。

モンパ病の病原菌は人の目に触れない土中で根に取り付いて少しずつ樹を弱らせていきます。樹上で葉の黄変や樹勢の低下が見られる頃には根の表面は既に白い菌糸で覆われている様です。

モンパ病の対策は、菌糸が覆い尽くしている部分を削り取り、薬剤灌注をするのが普通ですが、薬剤で病原菌を殺すだけでは不完全であると、アイエス科工は考えます。

土壌の微生物が病原菌と拮抗するような環境を作ることが大切なのは、どの作物のどの病気対策でも同じです。病原菌を減らすことだけでなく、新しい根を伸ばすための環境整備こそ大切です。

方法は簡単で、樹冠下を浅く掘り起し、そこに“VSTリコ・VS34・VSあかきん”を各1袋ずつと良質で肥料成分の少ない堆肥を混ぜて散布。そして土で埋め戻します。深くまで根を掘り起し、根の隅々にまでVSを覆い被せる必要はありません。そして着果を1/3程度に抑えて様子を見て下さい。

樹を回復させられるかどうかはその時点での罹病程度にもよりますが、最終的に伐採し、新植しなければならなくなった場合にも、その場所に病原菌と拮抗する微生物が生きているという安心感があります。



樹冠下を浅く掘り起こす。



“VS・3種”と肥料成分の少ない良質な堆肥”を散布し埋め戻す。



苗の新植の場合は、植穴周辺の土にVSを混和して1週間ほどなじませてから定植。